

圓教寺常行堂

圓教寺の三つの堂として知られる三つの建物の南側に位置する常行堂は、無量光仏である金色の阿弥陀如来を祀っている。この建物の特筆すべき特徴は神聖な舞楽やその他の奉納に使用される前方の舞台である。現在の建物は室町時代（1336–1573）にさかのぼる。お堂の名前が示すように、ここは僧侶たちが歴史的に阿弥陀像の周りを阿弥陀経を唱えながら歩き続ける瞑想的な修行を行っている場所である。時に、この修業は食事と短い休憩だけで 90 日もの間続く。

阿弥陀如来像はクラシックな瞑想する姿勢で描かれており、二重の蓮の花の上で胡坐を組んでお座りになっている。目は半分お閉じになり、手は穏やかに熟考を示す禅定印を保たれている。細長い耳たぶ、頭頂部の肉髻および螺髪は、仏像で頻繁にみられる図像的工夫であり、慈悲、知恵、および悟りを表している。阿弥陀様は金色の後光で描かれている。光輪は、阿弥陀様とその傍らに描かれることが多い慈悲と智慧の菩薩の「種音節」である 3 つのサンスクリット文字で飾られている。木造の背景には、阿弥陀とともに浄土の極楽浄土から紫雲に乗って降りてきて、衆生を救いに導く 25 体の菩薩が描かれている。

阿弥陀如来像も常行堂の建物も国の重要文化財である。